

お金というものを、生まれて初めてずっしりと実感したのは十四歳のときのことだ。

私は父の仕事の都合で海外にいた。その父が癌を患った。そのため、学校の就学期間が残っていた私を他の日本人の家に預け、父母と幼い妹だけ急いで帰国することになった。

その際、父母が私に現地のお金を渡し、大事に使うようにと告げた。その国では子供の私ができる銀行口座を開設することができなかった。だから現金での手渡しだった。本来、十四歳が持つべきではない、かなりの額だった。

異国の地で一人、私はそのお金を「抱いて」暮らした。さすがに懐に入れて持ち歩きはせず、居候先でお借りした机の、鍵付きの引き出しを銀行代わりにした。しかし実感としては常にそのお金を胸に抱いていた。少しでも減ることを抑え、父母に迷惑をかけまいとしながら、心寂しい日々を送った。

十六歳で父が亡くなったときは、すでに私も帰国していた。母は預金を整理し、またもや私にお金を渡した。高校を出るまでの学費と生活費をまとめて子供自身に管理させたのである。むろん異国の地



絵・江口修平

お金の重さ

沖方 丁

ではないので、そのときは子供の私にも銀行口座があった。だが十四歳のとき以上に、そのお金は、ずっしりとした実感を与えてくれた。

いったい何がそんなにずっしり重かったのか。今振り返って、それは信頼の重みであったのだと思う。父母が子供の代わりを支払ってくれるお金ではない。父母から託されたお金だった。自由に使っている。だがそれしかない。なくなればそれまで。まるでお金を通して自分を試されているようだった。父亡き後、母が私を信頼して、託してくれたお金。自分のものであって自分のものではない、社会にあって自分を試みるお金だった。

時は過ぎ、当時とは比べものにならない額を持つようになったが、お金は相変わらず私にとってずっしりしている。そして今は、私が養うべき子供たちがいる。今度は私が子供らに、お金と一緒に信頼の重みを教えねばならない。その責任もまたずっしりと重たい。

そうした重みを感じられなくなったとき、私はお金と一緒に、自分自身への信頼も失うだろう。それが私のお金への実感である。

うぶかた・とう●1977年岐阜県生まれ。96年『黒い季節』でスニーカー大賞金賞を受賞してデビュー。2003年『マルドゥック・スクランブル』で第24回日本SF大賞受賞。09年、『天地明察』で第31回吉川英治文学新人賞、第7回本屋大賞など5冠を達成。12年『光圀伝』で第3回山田風太郎賞を受賞。最新作は『はなとゆめ』。

